第1170号　第三種郵便物認可　みいけ　（毎月2回 1日16日）　1982年1月1日（金）（六）

原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百九十五号

原告団レポート

CO患者――白水 正信さん

裁判は、勝って当然だ

折り重なった下で助かる 体の抵抗力が弱っても気が短く

入替採用で

新港社宅（大牟田市新港町）五棟。堤防近くの一角に白水正信さん一家は住んでいる。

真新しい自転車が二台並べておいてあり、早速その説明。県堺（福岡県と熊本県の）のあるスーパーの、年末大売出しの抽せんで見事引き当てたもの。特等二本というのはめずらしい大当りだというので、子供たちも大はしゃぎである。

一家は、正信さんが昭和十五年生まれの四十一歳。妻のハツミさんが二十二年生まれの三十四歳。長男昌之くんが四十六年生まれで十歳、小学校五年生。長女純子ちゃんが四十八年生まれで八歳、小学校二年生。次男伸久くんが五十年生まれで六歳。幼稚園。それに母親フサ子さんが大正五年生まれで六十五歳。六人家族である。

奥さんのハツミさんは、いま臨時の商店づとめで会うことができなかったが、これまで子供が小さかったので、もっぱら家庭の人。

白水正信さんは、市内の右京中学を卒業すると自動車整備学校に入り、一年間学んだあと運転免許を取得。二年ほど運転手として働き昭和三十三年十二月十三日に坑外の資材管理係として入社した。

当時、組合と会社との間に結ばれていた入替採用の協定で、母親フサ子さんの定年退職によってである。フサ子さんは、「私は寮の炊事婦から選炭婦として働き、坑内の人のことを長いあいだこの目で見てきたので、坑内は絶対反対でした。一人息子だから坑外という条件で入替えしたんです」と当時を語る。

父を知らぬ

入替採用にもさまざまな事情がある。そのひとつは家のこと。なによりも社宅の確保であった。当時の退職金が三十万円ほど。女手ひとつで家を建てることなどおぼつかないし、正信さんもその頃の運転手は収入が少なかったし、必然の成りゆきだったといえる。

フサ子さんが炭鉱で働いたのは、夫七郎さんの戦死ではじまる。それも戦後二十二年。七郎さんは宮浦鉱から万田鉱と坑内勤めであったが十六年十二月、太平洋戦争の開戦まもなく兵役にとられ、久留米の竜部隊に属し中国雲南省との境をこえた、ビルマで全員玉砕したということで、戦死の公報は戦後伝えられた。白水正信さんは父親が入隊の年生まれで敗戦のとき五歳、父親を知らない。

こうして正信さんは、姉節子さん（東京に在住）とともに女手ひとつで育てられたが、「性格が明るくて、とても人に好かれた子でした。今とは違うけど……」と、お母さん。

青年行動隊

正信さんはやがて坑内に入ることになる。体も強かったがなにより坑外では収入が低かった。母親との約束を破って坑内機械工（切羽重工）になったとき「決めてきてから私にいうんですよ」とフサ子さん。

ここの職場は重労働で有名で、今でも語り草になっているほど。その労働にも耐え、ほとんど満勤していたという。

やがて三池闘争へ。正信さんはとくに組合運動に関心があったというわけではなかったが、青年行動隊が結成され、闘う若者たちと寝泊りを一緒にするなかで、また『三池と安保』という高揚する闘いのなかで、歩一歩とこの闘いが何かをつかんでいった。

母親のフサ子さんも頑張った。炭婦協の母として、新港社宅や三川支部の炊き出し、オルグの世話とかけまわる日々であった。フサ子さんの実兄が係長という職制であったので、「息子は新労に行きたがっている。母親が頑張ってないで……」と切り崩しや説得も激しかった。

正信さんも一度は刷新同盟のグループの集り（飲ませ食わせの）にも出たが、「げんかして帰ってきた。これは決定的でした」という。

助かった命

そのご腰を痛め、しばらく休んだのを機会に採炭工となる。

昭和三十八年十一月九日。その日正信さんは二番方で、上層三十六卸の西払に繰り込まれていた。現場近くの二十メートル近い竪坑をのぼり、大加背坑道の上段に設けられた休憩所で着替えをする。

さて現場へと、階段を降りかかったところで停電。たまにはあることなので、そのまま現場へ行く。払の中ではエアー（圧縮空気・鉄柱操作などに使う）が出ない。仕事ができないので、他の作業のために工具を取りに行く。さっきのぼってきた竪坑で黄色い（と思われた）煙にまかれる。すぐに引き返した。

休憩所付近では「なんの煙やろか」、「坑底でエアー管が吹いた（破れた）のではないか」などとざわめく。係員も「電話が通じない」という。係員は作業ができないから、早いが昼めしを食ってくれという。煙が近ずいてきた。

「ただの煙じゃないぞ」という声がある。階段を降りかかったところで膝がガックリとなり、最初に二メートル半ばかりのところに転落した。それから先のことは、ところどころしか記憶にない。

体が動かない。その自分の上に何人もの体が折り重なっている。ちょうど階段の下なのだから、次々と落ちたのだろう。のちに植物人間となって死んだ宮島くんも一緒だった。自分の上のものが死んでいる。

それからどうなったかは定かではないが、自力ではい出し、竪坑を降り本線を歩いたように思う。あとで聞いた話では、溝の中に顔を突っ込んでいたというし、頭や顔を強く打っていた。気がついたときは宮浦鉱の炭函の中だった。

「部内で一番さきにガスを吸ったのですが、折り重なった一番下なので、打撲はひどかったが、濃いガスから逃れられたのかもしれない」と述懐する。

職場復帰へ

「ドーンと音がした時、ちょうど洗濯屋さんがきていて、なに事かと外に出て、あのキノコ雲みたいなのを見た」――と母親のフサ子さん。しばらくして近所の栗林さん（退職者）が「二番方に出たな」というので、「出ました」といったら「しもた！」といい「坑内で何人死んだかわからんばい」と爆発のことを知らされた。そのあと親せきの者が寄ってきて「血圧が高いのと、苦労して育ててきた息子がどうなっているかわからないとなったら、どうなるかわからない――」と家を出さない。

翌朝二時半ごろ、あちこち走りまわっていた親せきの者が、天領にいると知らせてきて、タクシーで天領病院へ。

「よう歩ききらんやったですよ。左眼が見えんし、膨れとったですね。顔や足をひどくやられていました。一時天領に通院したあと、労災病院に入院。四十三年労災病院を退院し、三川鉱柵内の訓練をうけ、障害等級九級に認定される。

その後職場復帰して坑外の選炭へ。不眠やいらいらがつづき半年しかもたず、医師からも新港作業所へとすすめられたが、四十七年に現在の分析室に移った。

四十四年当時の診断書によれば、自覚症状＝頭痛、耳鳴、視力減退、胃腸障害、四肢のしびれとあり、神経・精神症状＝軽度の情意鈍麻、記銘力、計算能力減退、自律神経症状あり、などが記載されている。

確信もって

いまでも二カ月毎ぐらいに、周期的に風邪の症状が起こり、十月などは月に四日ぐらいしか風呂にも入らなかった。「抵抗力がなくなって、気が短くなった」と本人もいう。

幸い正信さんには、被災のあと現場復帰してから結婚した、愛妻のハツミさんがいる。姉さんの婚家で知り合って四十五年に結婚。熊本県鹿本郡の農家の出身で、健康で気立てがよく、美人でいうことなし。

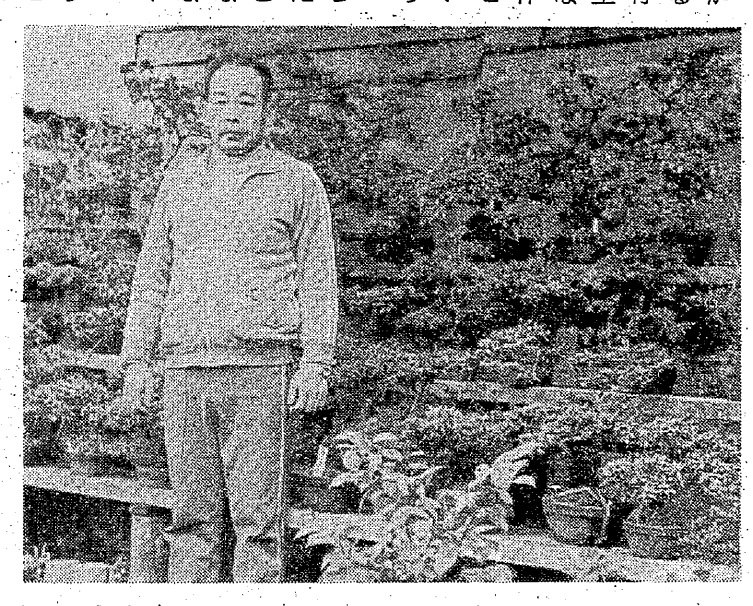
生活は、残業をしてようやくということだが、フサ子さんの年金をあてにしなければ六人の生計はたてられない。

お酒は好き。魚釣りも小学生の頃からやってきたが、風邪のために行けない。若い時は登山もやったが、今では盆栽ぐらい。それも調子がいい時だけ。さつきの鉢がずらりとならぶ。花どきはさぞ見事なことに違いない。肥後つばきが大きな芽をふくらませ、開花をまっている。

「刑事責任をうやむやにしたのが一番問題。保安サボで災害が起こったのだから、裁判は勝ってあたり前」と確信を持っている。

三池闘争中、新港社宅の青年行動隊の仲間とともに。（昭和38年8月＝後列右端の人）

2年前の写真。新港社宅5棟の自宅横で、妻ハツミさん、母フサ子さん、純子ちゃん、伸久くん。



自宅裏で、たくさんのさつき鉢に囲まれて。

原告団消息

12月13日　遺族会総会。家族の会役員会議。

14～15日　田川、三菱方城炭鉱ガス炭じん爆発慰霊祭。池畑重富、永江美由紀参加。

16日　原告団役員会議。

17日　山野裁判。小川紘志、石原政子、永江美由紀参加。

17日　縫製工場団結集会。

21日　福岡県被災者の会（代表参加）。

中西美幸さん（9・28）曙病院にて加療中。

山下ひで子さん（遺族）15日付でアソニット工場定年退職。

住所変更　吉田磯彦曙病院々長　福岡県小郡市三沢四三三五番地　三四六。